

就職シーズンに寄せて

1 報 道 系 就職活動支援部 新聞立派風説 (株)中国新聞社 向山 敦子

2022年3月15日 5面掲載

1 (総合科学部 昭和62年3月卒業)

新聞記者生活も三年目。警察担当、遊軍を経てこの春福山支社に転勤になった。「新人」の冠は時とともに取れても、「女性」の方はなかなかはずしてもらえないことを実感する一方、女性キャスターが華々しく活躍するテレビニュースがなぜか気になる。複雑な毎日を送っている。

入社以来、どういうわけか事件が多い。あの総合科学部長刺殺事件では住み慣れた母校に窓から侵入するはめになったし、正田元県議が逮捕された時は、自宅のガサ入れの写真を撮るため、家の窓が開かないかと一つずつ調べて回った。ただ恥ずかしいだけで何の役にも立たなかったが、ほとんど『フォーカス』記者のような自分の姿を想像すると、悪夢のようできて、なぜか笑える。天皇逝去の日は早朝から夕方まで雨が冷たかった。

けれど、転勤してきて広島での2年間を思い出してみると、頭の中にくっきりと残っているのは、大きな事件よりもむしろ、防犯課で顔見知りになった妙に明るいピンクビラ貼り常習犯のおばさんや、交通事故で家族をなくした人の様々な悲しみの表情のようだ。施設を転々としてきた老齢の障害者が「新聞に載せて」と差し出したカタカナばかりの自分史。踏み切り事故現場の血まみれの手首。そして事件のたびに被疑者の連行写真を撮ろうとじっと待っていた中央署の駐車場であと見上げた秋の空……。字にならなかったことの方が多いいのは記者として情けないが、これがなかったら今ごろはもうギブアップしていたに違いない。

ビラ貼りのおばさんや線路の死体に、予想もしない毎日に飛び込んでしまった自分を重

ね、人間の運命についてあらためて考えることがある。新聞記者になるなんて就職活動の直前まで考えてもいなかったし、内定をもらった時は「えらいことになった」と一家が額を寄せ合ったほどだ。それなのになぜか今、この仕事を一生続けたいと思う不思議さ。こうなるとピンクビラを貼っている自分も、線路でミンチになっている自分も運命だったと抵抗なく受け入れられる気がする。

つい一瞬前の一步が次の一步を決め、その積み重ねが思いも寄らない世界へと連れていくことがある、とつくづく思う。敷いてあるレールを歩くのではなく、一瞬前の自分に押し出されるようにして、自分でも知らないうちに新聞記者や普通の主婦やビラ貼りや、あるいは死に向かって歩き出している。とりあえず記者になっている私は、一体どこへ向かって歩いているのか……生まれつき怠け者の私は、その先に何があるのかわからないがとりあえず行ってみようという気持ちを、記者になって遅ればせながらに学んだように思う。

毎年就職シーズンになると「記者になりたい」という数人の学生から電話をもらう。「生半可な気持ちならやめた方がいいよ」と言っていた私も、今年は「面白い仕事だから頑張ってみたら」と答えておいた。どうせ運命はこちらの考えになど頓着せず、どこかへ連れていく。長い目で見たりせず、とりあえず好きなように挑戦してみることをお勧めしたい。人生に前向きな明るいピンクビラ貼りおばさん、というのもきっと素敵に違いない。